矮小不規則銀河NGC4449における

星形成現象の研究

三澤瑠花 (日本女子大学)

西浦慎悟, 土橋一仁, 柏木雄太(東京学芸大学) 濤崎智佳 (上越教育大学), 伊藤信成 (三重大学) 富田晃彦 (和歌山大学), 泉田史杏 (東京大学)

銀河によって星形成が異なるか?

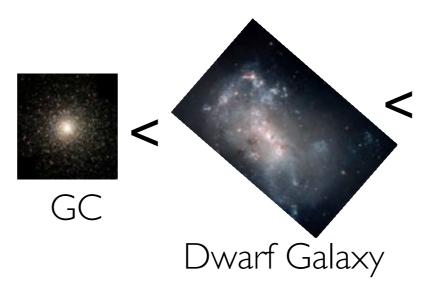
- 星形成は局所的なもの
- ISMの状態は銀河の形態によって違う...

SpiralsよりもDwarfsはlower dust, lower metallicity, smaller molecular core...etc (e.g., Hunter & Thronson 1996)

が、星形成過程は同じ(Gallagher & Hunter 1984)

⇒そこでSpiralsよりもより簡単な系のDwarfsを調べた

- Dwarf Galaxy
 - Mass: 10⁶⁻¹⁰ Msun
- Dwarf Irregular Galaxy(dlrr)
 - gas rich
 - active star forming
 - →星形成を調査するのに最適!

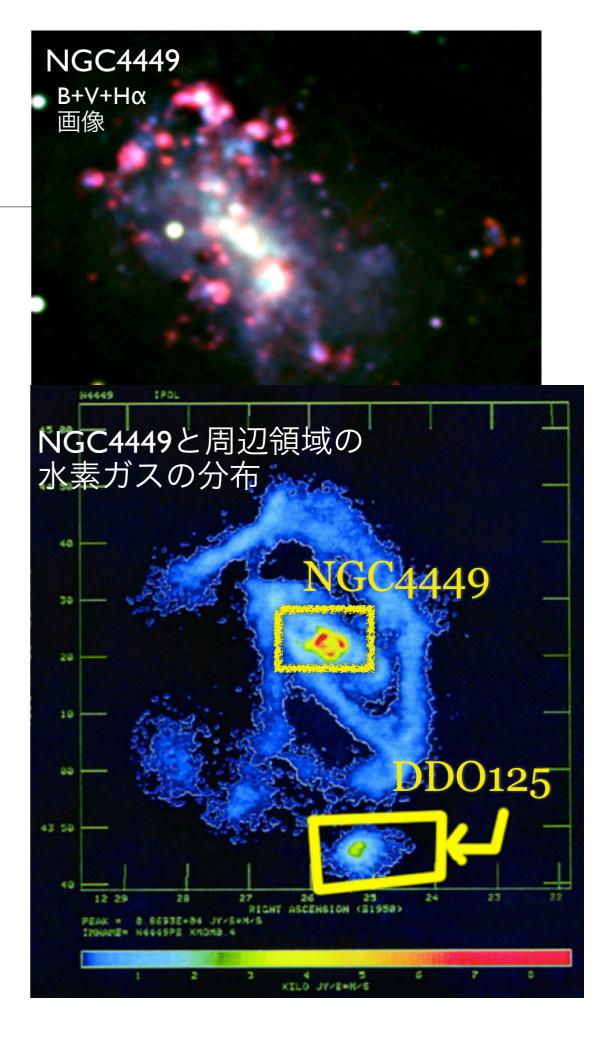




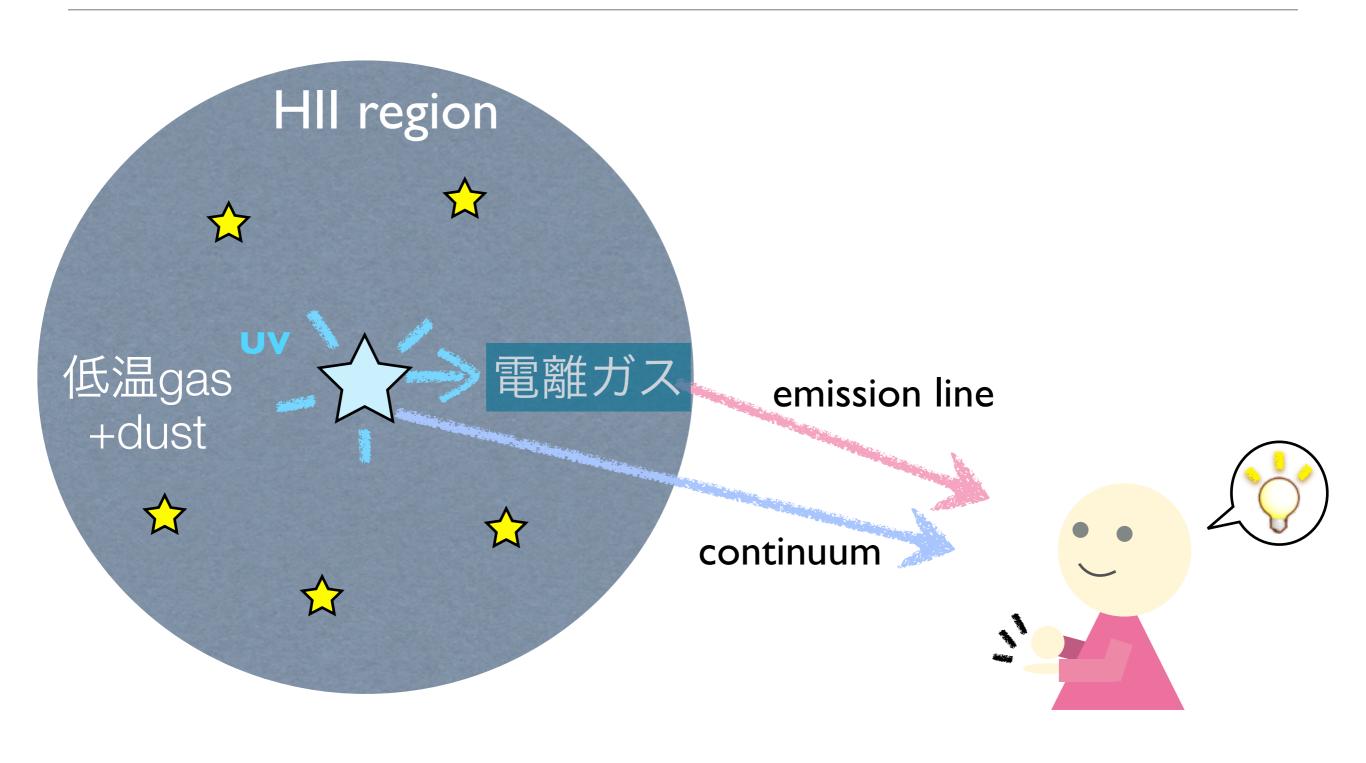
Spiral Galaxy

Dwarf Irregular Galaxy NGC4449

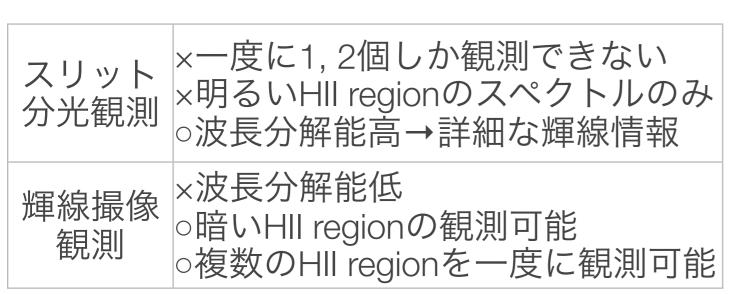
- 特徴
 - 棒構造がある
 - 非常に活発に星形成中 (銀河間相互作用で活性化)
 - →活発な星形成領域の研究がしやすい
- ・メリット
 - 構造が簡単
 - 銀河系近傍に位置
 - →空間的に分解しやすい
 - 星形成に関する先行研究が豊富
 - →比較しやすい

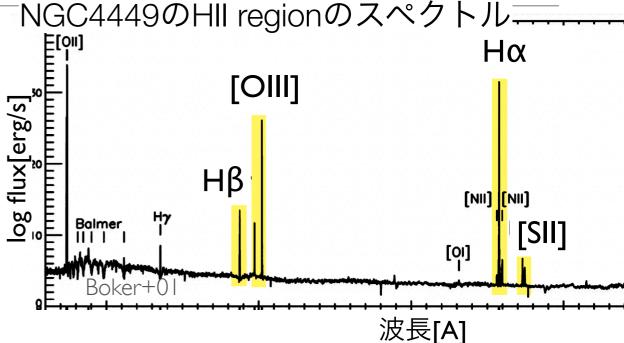


HII region



HII regionの観測手法





先行研究

分光観測:

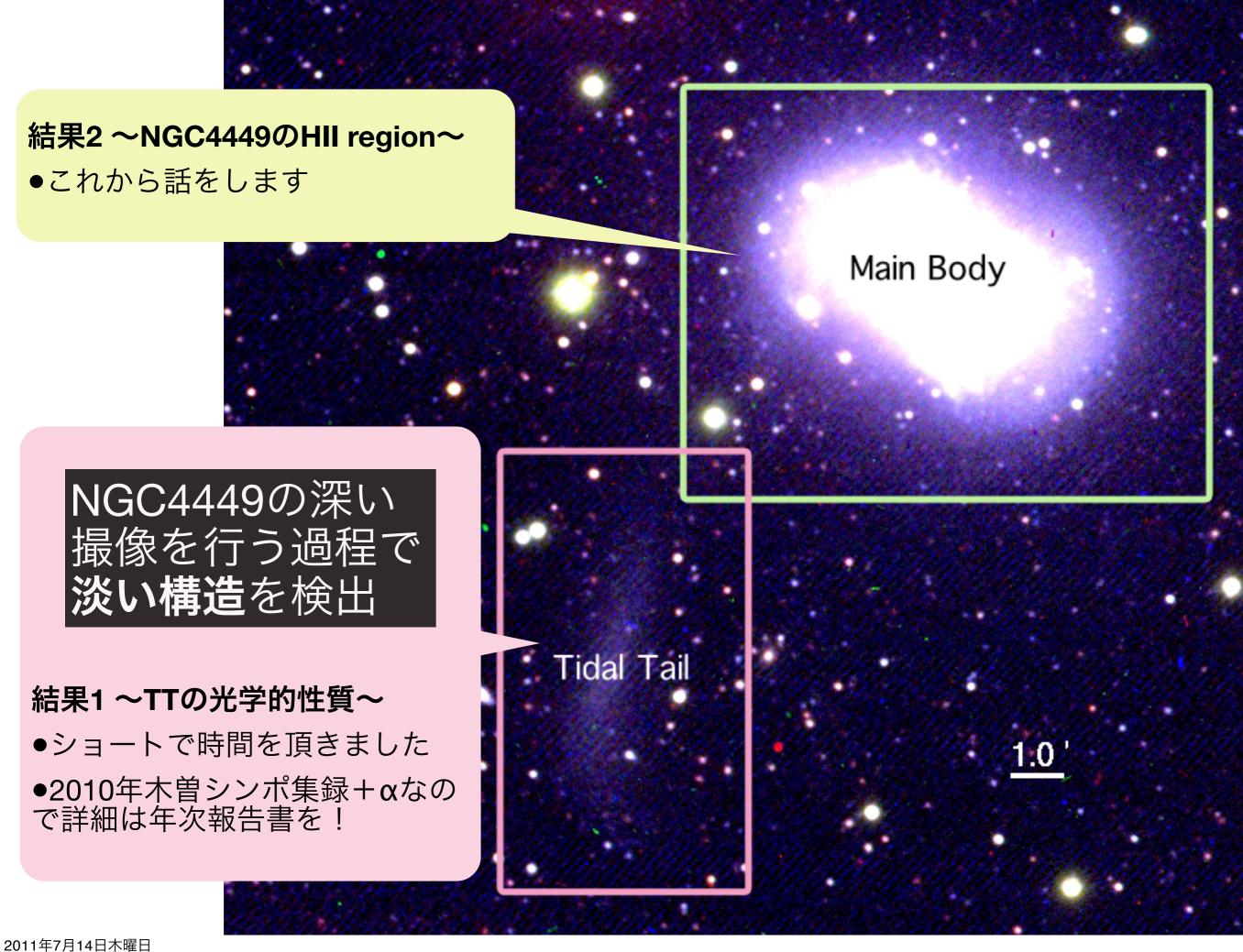
数個の明るいHII regionの観測のみ(e.g., Boker+01, Chomiuk&Wilcots 09) 輝線撮像観測:

多くはHα輝線の観測のみ(e.g., Guisen+08, Gutierrez&beckman 10)

多輝線&暗いHII regionの観測で先行研究では見えてこなかった 星形成の性質を明らかにできる可能性あり!

…そこでHII regionに特徴的な波長で輝線撮像観測を実施

木曽105cmシュミット望遠鏡での観測と結果



データ概要

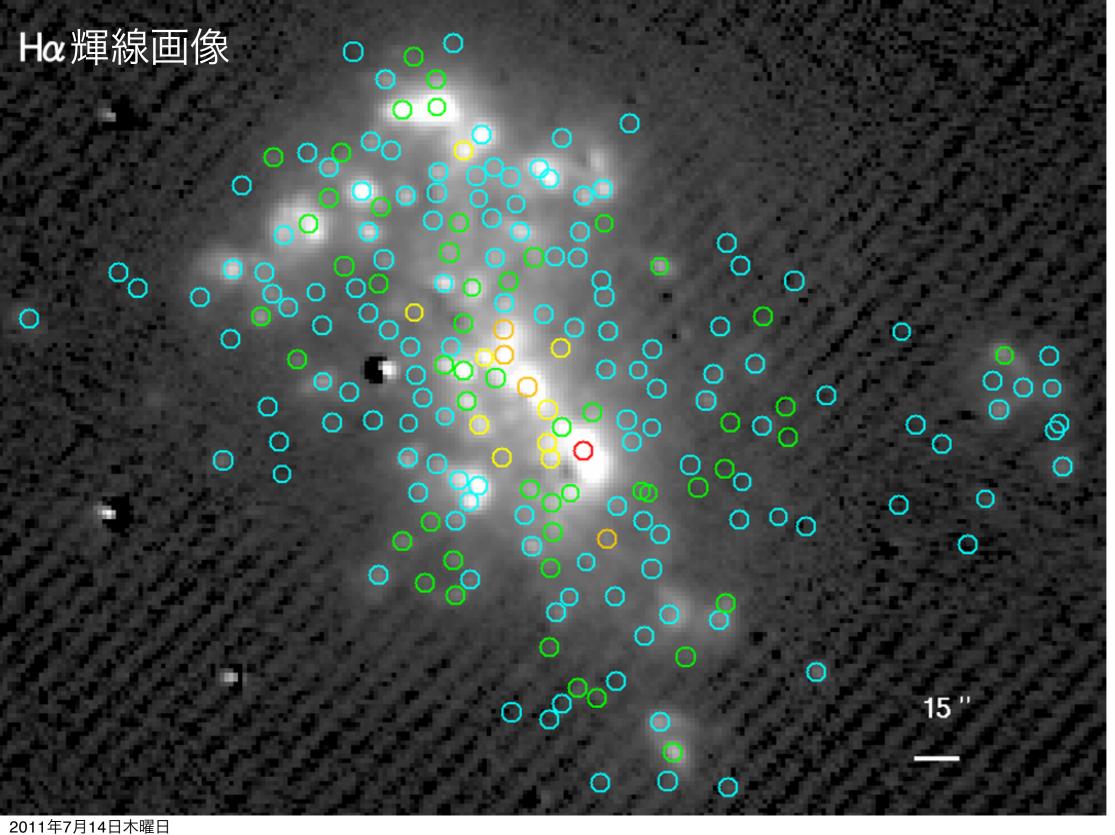
Observation dates2007-2010の12夜

- Filter
 - Broad bands: U, B, V, Rc, Ic
 - Narrow bands: N487(Hβ), N499([OIII]), N519(emission line free),
 Ha6517(emission line free), Ha6577(Hα), Ha6737([SII])

	U	В	V	R	I	N487	N499	N519	Ha 6417	Ha 6577	Ha 6737
exp. time [sec]	1500	1200	2400	2820	3720	3600	3600	3600	12540	12240	12240
seeing (FWHM) [arcsec]	5.25±0.75					3.75±0.75					

Reduction/Analysis
 IRAF, SPIRAL, SDFRED, SExtractor

HII regionの検出



• 検出数 Hα→201個 Ηβ→147個 [OIII]→182個 [SII]→194個

輝線光度関数

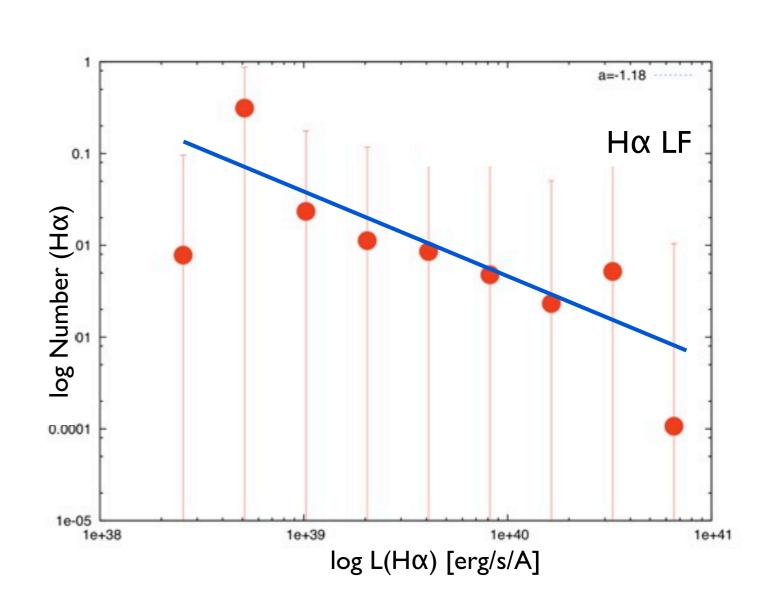
- 光度と単位光度LあたりのHII regionの個数Nの関係 dN(L)=LadL
- 暗いHII regionと明るいHII regionの相対的な個数の比
 - →勾配が緩やか
 - →相対的に明るいHII regionが多い
- ●勾配

 $H\alpha:-1.18\pm0.24$

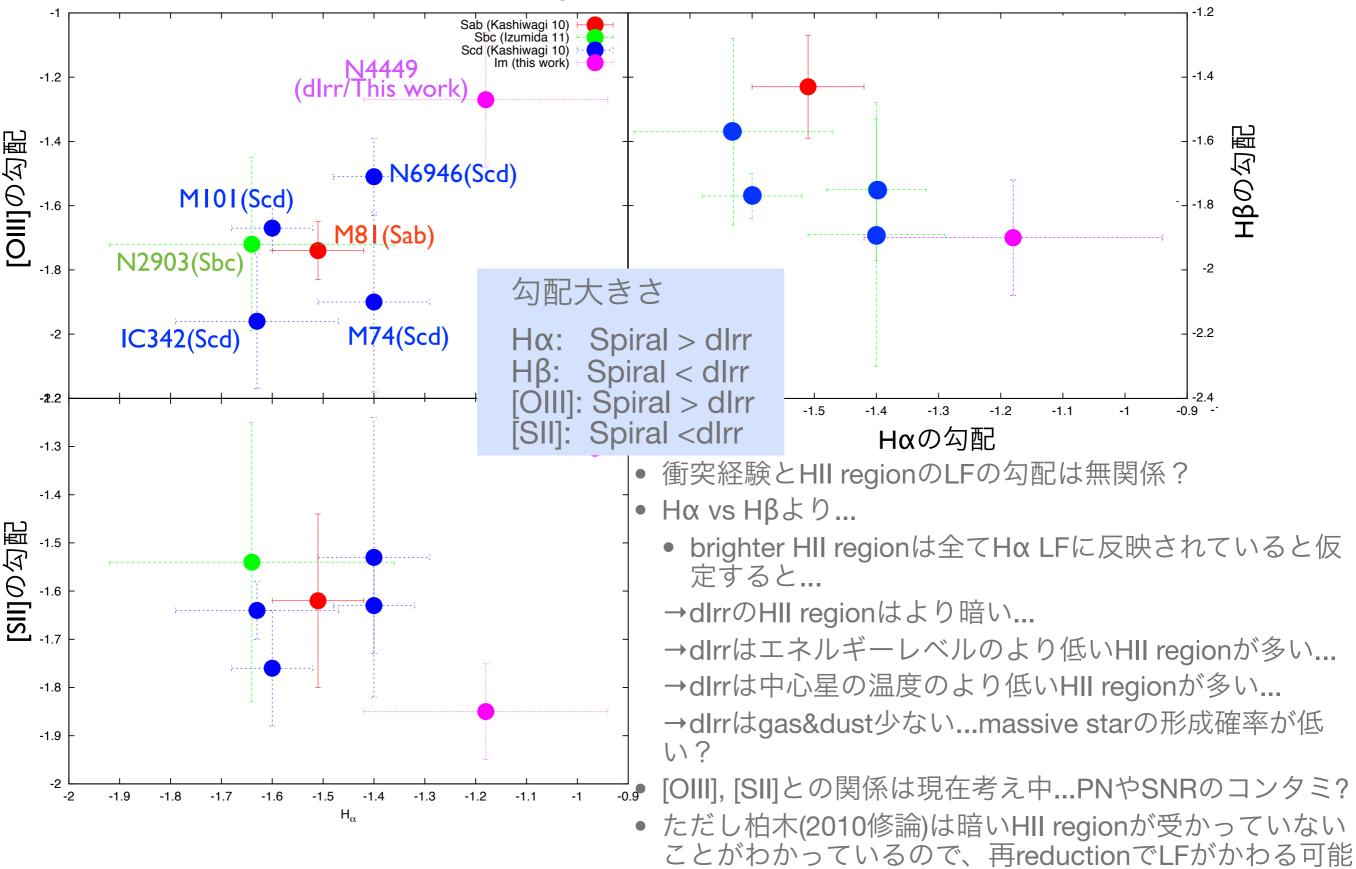
 $H\beta:-1.90\pm0.18$

[OIII]:-1.27±0.21

[SII]:-1.85±0.10

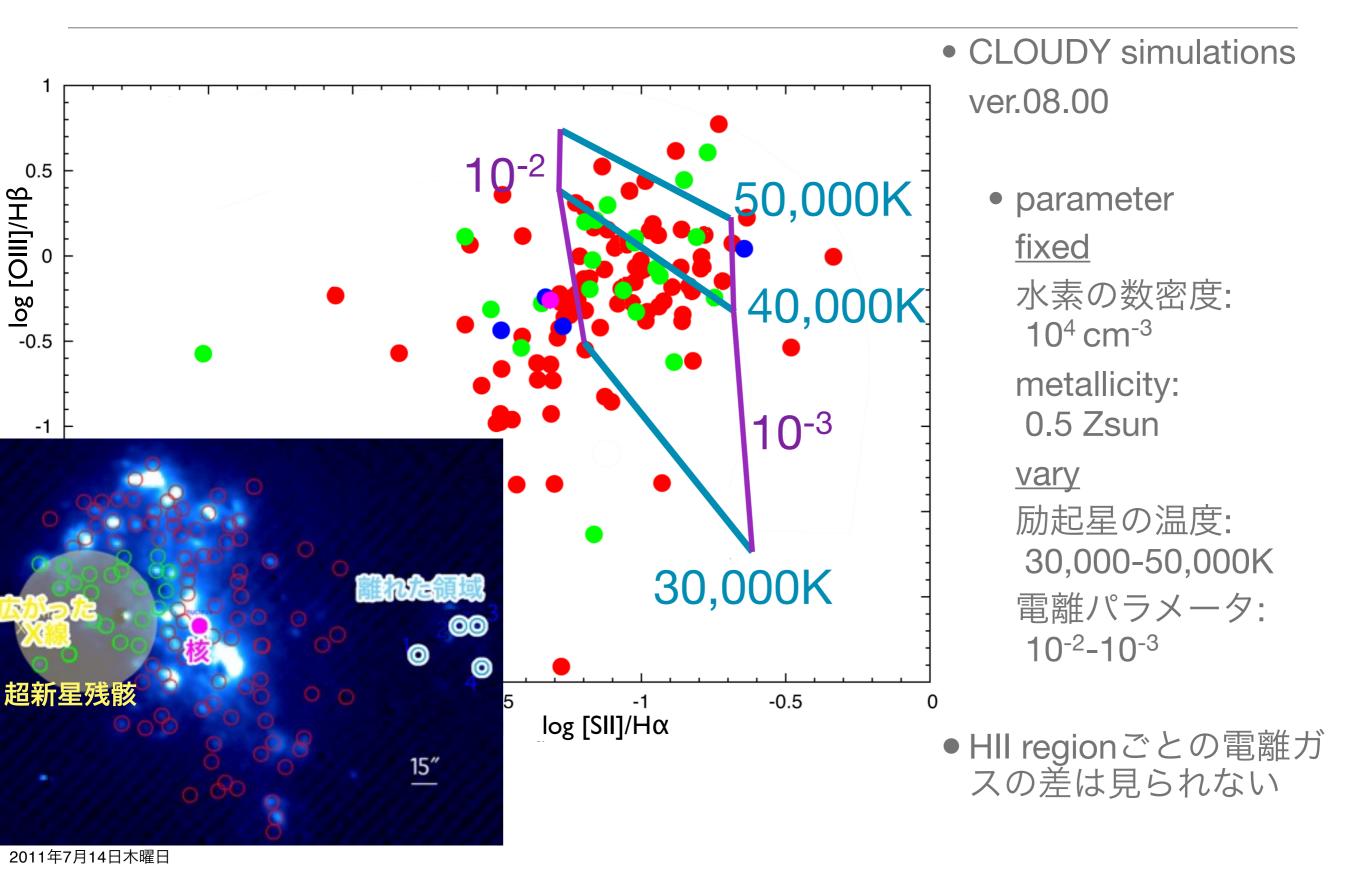


銀河の形態による輝線光度関数の勾配比較



性がある… (実際はもっとsteepになるのではないか?)

電離ガスの状態



Internal Extinction

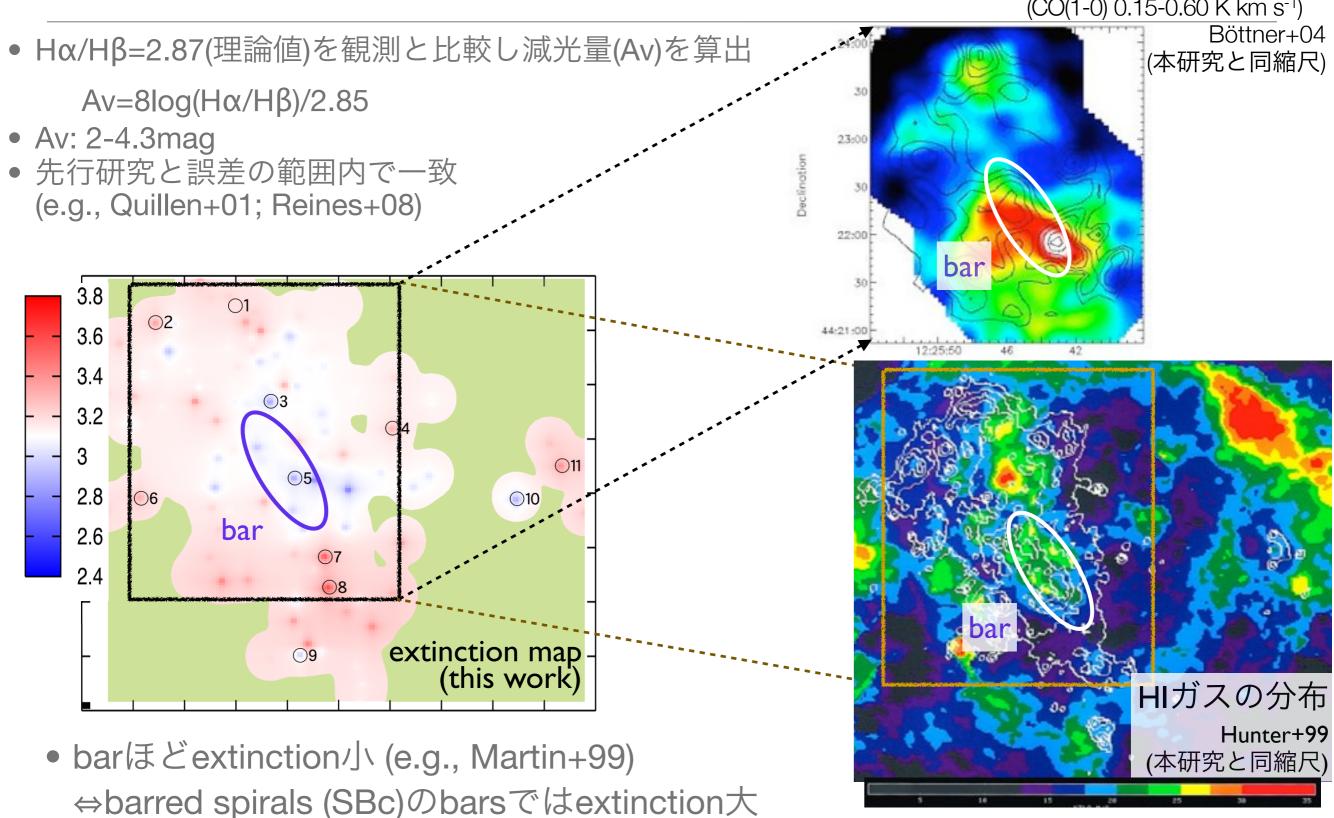
COの分布

強度分布:

(SCUBA:850um CO(J=3-2))

コントア:

(CO(1-0) 0.15-0.60 K km s⁻¹)



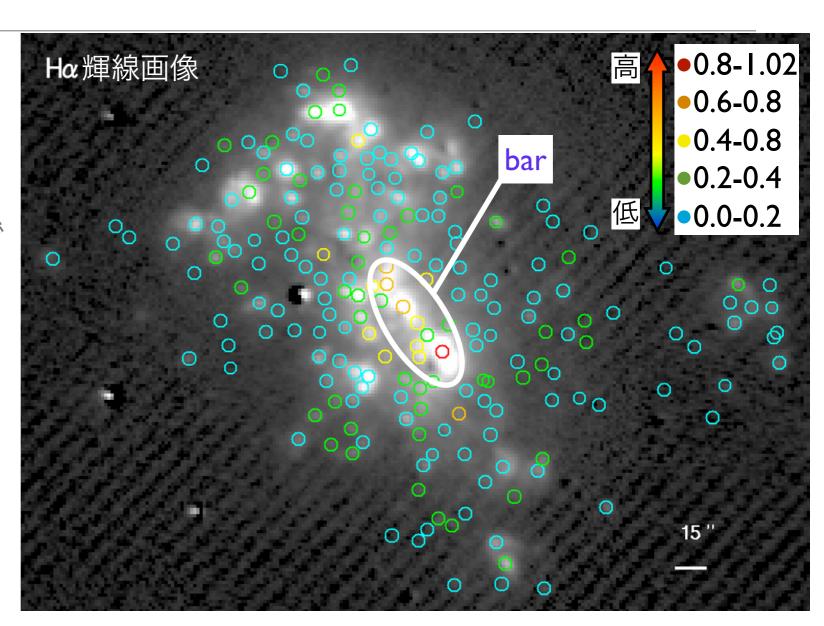
SFR

- Hαの強度から算出(Kennicutt 98)
- SFR[Msun/yr]=7.9×10-42×L(Hα) [erg/s]
- 0.00~1.02Msun/yr
- SFRは先行研究と誤差の範囲内で 一致(e.g., Ott+05)
- barほどSFR大
 - →他のdIrrのbarの報告と一致 (Hunter & Elmegreen 06)
 - ⇒barred spiralsのbarsでは...

SBm: SFR大

(Elmegreen&Elmegreen 80)

SBc: SFR小(Martin+99)



棒渦巻銀河の棒構造とは異なった性質の構造かも!!

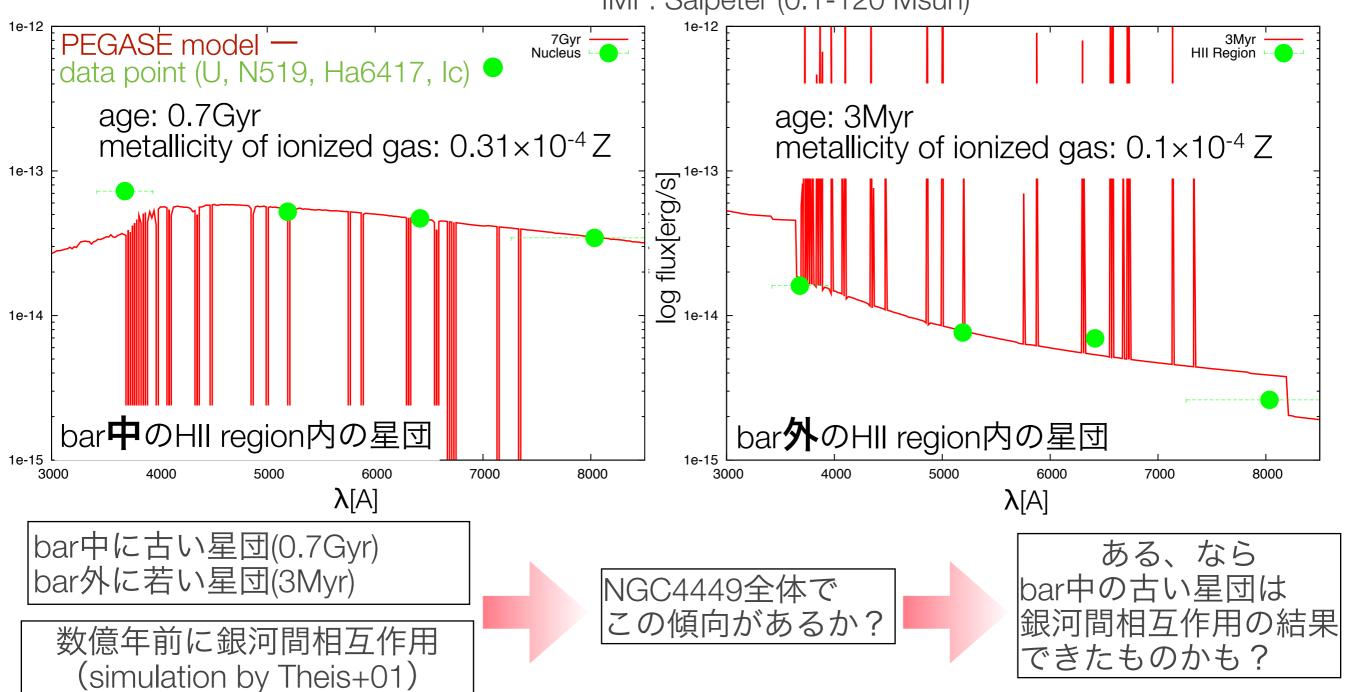
star clusters OSED

• PEGASE (Fioc 1999) による Simulationとの比較 mass loss: SN II + stellar wind

infall time scale: 10 Gyr

SFR: constant

IMF: Salpeter (0.1-120 Msun)



まとめ

- HII region LFの傾きは衝突経験の有無とは無関係?
- Spiralsに比べてdlrrはmassive starの形成確率が低い?
 - →Spiralsを再キャリブレーション&もっとサンプルを増やす必要あり
- 中心核や超新星残骸に付随するようなHII regionや銀河間相互作用でできたと 考えられる構造でもHII regionに差は見られなかった
- extinction小&SFR大 のためNGC 4449のbarはbarred spiralsのbarとは違う?
- bar中の古い星団は銀河間相互作用の結果出来たものかも...